

防已黄耆湯

I. 出典

風湿脈浮、身重ク汗出デ悪風スル者ハ、防已黄耆湯之ヲ主ル。

(『金匱要略』痙湿喝病篇)

風水脈浮、身重ク汗出デ悪風スル者ハ、防已黄耆湯之ヲ主ル。腹痛メバ芍薬ヲ加エヨ。

(同水気病篇)

『外台』ノ防已黄耆湯ハ、風水ヲ治ス。脈浮タルハ表ニ在リト為ス。其ノ人、或ハ頭汗出デテ表ニ他病ナシ。病者タダ下重ク、腰ヨリ以上和ヲ為シ、腰以下当ニ腫シテ陰ニ及ブベク、以テ屈伸シ難シ。

(同・附方)

II. 構成生薬と薬能

防已： 辛苦寒。去湿作用。水湿停留の症状を治す。特に重力に抗して利水と浮腫を去る働きが強い。風腫水腫の主薬。

黄耆： 甘温。気を補い、表を固め汗を止める働きがある。防已与合わせるると風湿を去り、正気を扶け、邪を逐う働きが強められる。白朮と合わせると止汗作用が強められる。黄耆は補気の中でも表衛を補う。

白朮： 苦甘湿。脾を健にし、湿を乾かす。健胃補中燥湿止汗。

(蒼朮： 甘温、辛烈。汗を発し湿を除く。風寒湿を散じ、痿を治する要薬とある。胃を燥かし脾を強くする。)

甘草： 甘平。防已の性の劇烈なのを緩和する。健胃補中利水的作用を有す。

生姜・大棗： 甘辛温。風邪を発散し、榮衛を調和、脾胃の気を守り、諸薬の働きを強める。

III. 使用目標

本方は、体力がなく色白で筋肉が柔らかく、肥満の傾向がある、いわゆる水ぶとりの体質の人に用いられることが多く、主要症状は浮腫、発汗過多、体が重く疲れやすく尿量減少などである。中年以降の女性の肥満者で、運動不足のものにこのような症状を呈するものが多い。

IV. 適応症

上記の使用目標に従って次の諸疾患に適用される。

変形性膝関節症、関節炎、多汗症、肥満症、浮腫（原因不明の）。その他、腋臭症、腎炎、ネフローゼ、妊娠腎、陰囊水腫、疲労倦怠感などに用いることがある。

V. 古典

1) 『古方便覧』

水病身重くして汗出て悪風し、小便利せざるものを治す。

2) 『漢陰臆乗』

湿邪に感し表虚汗出悪風浮腫等の症に用ゆ。

3) 『医療手引草』

風湿相打ち客が皮膚関節に在り疼痛し腰以下疼重脈浮自汗し悪風するものを治す。

4) 『類聚方広義』

防已黄耆湯は専ら肌表に水気ある者を主り、此方は表裏に水ある者を主る。故に防已、黄耆は防已茯苓湯より多し、風毒腫、附骨疽、穿踝疽、稠膿已に歇み、稀膿止まず、或いは痛み、或いは痛まず、身体瘦削し、或いは浮腫を見はす者を治す。若し悪寒、或いは下痢する者には更に附子を加ふるを佳と為す。

5) 『勿誤藥室方函口訣』

此方は風湿表虚の者を治す。故に自汗久しく止まず、皮表常に湿気ある者に用いて効あり。蓋し此方と麻黄杏仁薏苡甘草湯と虚実の分あり。彼湯は脈浮汗出せず悪風の者に用いて汗を發す、此方は脈浮にして、汗出で悪風の者に用いて解肌して愈ゆ。即ち傷寒中風に麻黄桂枝の分あるが如し。身重は湿邪なり、脈浮汗出では表虚する故なり。(中略) 服後虫の行くが如く、腰以下水の如く、云々は皆湿気下行の徴と知るべし。

6) 『腹証奇覽翼』

後出

7) 『外台秘要』

風湿の章と、風水の章の木防已湯の條文に『金匱要略』水気病篇・附方と全く同一の條文がある。出典参照。

VI. 加減方・用方

(金匱要略?)

喘する者には麻黄半両 (4.0g) を加う。

胃中和せざる者には芍薬三分 (3.0g) を加う。

気上衝の者には桂枝三分 (3.0g) を加う。

下に陳寒ある者には細辛三分 (3.0g) を加う。

服して後、当に虫の皮中を行くが如し。腰より下氷の如し。後被上に坐し、又一被を以て腰下にめぐらし、温めて微しく汗せしむれば差ゆ。

(漢方診療のレッスン)

防已の鎮痛効果の増強に黄耆、麻黄、薏苡仁の加味。

VII. 類方鑑別

越婢加朮湯： 浮腫、関節の腫脹・疼痛、尿量減少などの症状は似ているが、比較的体力があって筋肉のしまりがよく、口渇、尿量減少の強い場合に用いる。

桂枝加朮附湯： 体力がなく手足の冷えが強く、水ぶとりでない場合に用いる。

防風通聖散： 肥満症で太鼓腹を呈し、筋肉のしまりがよく、便秘のある場合に用いる。

防已茯苓湯： 筋痙攣、振戦、麻痺感等がある。防已黄耆湯は表裏に水があり、本方は表に水がある (皮水)。

VIII. 治験

1) 『古方便覧』(六角重任)

男子年六十余。平生身微脹し、皮膚黄色にして、時々面目浮きはれて、足脛重くして、歩履すること甚だなやみて園を窺わざること三四年なり。余此方をあたへて、小便快利し、諸証やや退き、杖を曳いて能く歩することを得たり。

2) 『腹証奇覧翼』(和久田叔虎)

後出

3) 『漢方診療三十年』(大塚敬節)

蕁麻疹

三十三歳の色白い婦人。両手の軽微の浮腫、ときどき頭痛、口渇、帯をしめた跡が赤く腫れてかゆい。月経前に増悪する。脈は浮大で結代する。色が白くて太っていて、浮腫があるのを目標にして防已黄耆湯を与えた。三ヶ月間服用して全治した。

4) 『日本東洋医学雑誌』 五卷一号 (藤平健)

ネフローゼ

二十一歳の女性。昭和二十七年一月下旬、下肢の浮腫と尿量減少とを伴って発病。三月上旬に大学病院に入院、下肢の浮腫と高度の蛋白尿が消失しない。

全身倦怠感・尿量減少、脈は浮弱、舌は湿って白苔中等度、腹は膨満してやや柔らかい。初め当帰芍薬散・五苓散・小柴胡湯・桂枝茯苓丸料・小半夏加茯苓湯・防己茯苓湯と次々に一週間ずつ与えたが、五ヶ月間依然として蛋白は強陽性であった。腰以下腫れて陰に及び、もって屈伸しがたいのを目標として防己黄耆湯を投与したところ、半年ぶりで尿量増加し、尿中蛋白は減少し、三週間で蛋白尿は全く消失した。よって故意に服薬を中止させたところ、二日目から尿量減少し、蛋白尿が現れた。

防己黄耆湯の内服を再開したところ、三日目から尿量増加し、蛋白尿も微量となった。前後六十日服用して諸症状が消退した。

5) 『日本東洋医学雑誌』 十一卷四号 (矢数道明)

狐臭 (わきが) 腋窩多汗症

三十歳の未婚婦人。わきがが治るでしょうかとって来院した。きくと十四歳のときから腋下に汗が出て、自分ではその臭気にはまがならないと訴える。皮膚科の治療もうけたが治らないし、この種のもは手術してもむだであるといわれ、悲観して結婚も断りつづけてきた。患者の肌は白く、まるまると太っていて、皮膚や筋肉は軟らかく、水ぶとりで、頬はリンゴのように紅潮していた。初診は二月下旬の余寒のきびしいころであったが、厚いセーターの上から一見してわかるようにビッシヨリと濡れてそこが変色していた。上衣をとると腋窩から数条の汗が流れている。夏冬にかかわらずこのようで、夏はとくにひどく、人前に出られないという。その他の自覚症状としては、全身倦怠感・動悸・不眠・肩こり・下半身の冷え・牛乳を飲むとたちまち太ってくるとのことなどである。

私はこれを風湿による防己黄耆湯の証としてこれを与えた。すると服薬を始めた翌日から、自分でも驚くほど尿がたくさん出て、発汗が少なくなり、十五日分服用したときは、腋窩の発汗が全く苦にならなくなった。患者は蘇生したようによろこび、夏はどうかと心配しながら、半年間七月いっぱい服用したところ、この夏の暑さにも変わりなく、十五年間苦しんだ腋窩の多汗症がすっかりよくなって廃薬した。

防已黃耆湯についての古人の治験例は意外に少く、口訣類にも参考になるものが少ないが、和久田氏の「腹證奇覽翼」二篇には、防已黃耆湯について、次のように述べられている。

「防已黃耆湯の方、水氣、皮膚に在つて腫れるが如く、或は腫るるものを治す。其方、防已を以て君とし、黃耆、朮これが臣たりといへども、其黃耆を伍する所以、一律ならざるることなし。而して其意、専ら正氣を健通せしめて浮行の水氣をして回降せしむるにありて、他の氣血の鬱滯を解和するの意なし。桂枝、芍藥を伍せざる所以なり。」と論じたのち、「表虛」を診する法を、次の如く、具體的にのべている。即ち「其表虛水氣を診するの法、病人肌膚肥白にして、之を捫（ひねること）するに、其肉軟虚にしてしまりなく、ぐさぐさとするもの、是れ、正氣表に旺せずして、浮水泛溢するものなり。腫るるに非ずといへども、以つて表虛の水氣とすべし。」とのべて、色の白い、肉の軟い、俗にいふ所の水ぶとりのものを、表虛の徴候としている。次に、具體的な例として、「此の證、男女老少を問はずといへども、多は室女、許嫁の年齒より以上、二十歳の前後までに、卒に肥滿をなして、衝逆（のぼせ）強く、兩頬、紅にして、經水、短少、心氣鬱して開かざるもの、この證あり。是れ、其の肥滿を成すもの、成長の時に當りて可なるに似たりといへども、其實は表虚にぞくして、以つて佳候とすべからず。醫、若し其の經水不利なるを見て、誤つて通經、破血の劑を投せば徒らに效を奏せざるのみならず、反つて禍端を啓くことあらん。また嘗て記す、一男子、痼冷を患ふこと年あり、夏月、衣を重ね、たびを着け、あまねく溫熱の劑を服して寸效なし。京師に來りて、名醫の診を請へども效を見ず。一醫生あり、深考して以つて、此方を與ふること一月許にして、宿痼全く愈ゆと。」をあげ、「濕」の字については、「濕はしめるなり。水と云はずして、濕というものは、水のごとく腫れても、之を按ずに、其あと凹まず、但、皮肉のしまりなく、ぐさぐさとするもの、肌膚を濕めらすのごとくなるを以つて濕と名づく。俗に呼んで、わるぶとりというの類、皆濕證とすべきなり。是れ亦正氣のはり弱わきを以つて、水氣之に乗ずるもの故、後世氣虛の候とするなり。」と説明している。

筆者は、この奇覽翼の一文をよんで、初めて、この藥方使用のヒントを得、次の如き場合に、この方を用いている。

防已黃耆湯證は、男子より婦人に多く、殊に、所謂有閉マダムに多くみられる。色の白い水ぶとりの婦人に、この證がある。もつと瘦せたいとの希望をもっている人が多い。この種の人は、からだが重くて、起居動作がものうく、掃除や炊事をまめまめしくすることを好まないというよりは、それをするのが大儀である。外出しても、自動車を利用し、からだを動かさないので、ますます肥滿してくる。食事の量は少く、一回位い食事をしなくても平氣である。湯茶を好む人が多い。大便は大抵毎日ある。便秘することは、まれである。月經の量の少ない人がある。また不順を訴える。多汗症で、夏の汗は流れる如くである。この種の婦人で、五十歳を越すと、膝關節の痛を訴えるものが、可成りある。また夕方、靴やたびが窮屈になるほど、足に浮腫がくる。尿の検査をしても、蛋白は證明できない。腹診しても、腹部は一體に膨滿しているが、抵抗や壓痛はなく、軟弱である。

以上の如き患者に、防已黃耆湯を用いると、筋肉がしまつて、からだは軽くなり、膝關節の疼痛や下股の浮腫がとれる。戰爭末期から、終戦後、三四年間は、この防已黃耆湯の證は少くなつていたが、近年また次第に増加しつつある。美食と運動不足が、大いに原因しているであろう。

この種の婦人に、防風通聖散や大柴胡湯を用いると、却つて疲勞が甚しくなる。

防已黃耆湯を關節リウマチに使用する場合にも、上記の症状を参考にして用いる。なお筆者は、この藥方の方後の加減方を考慮に入れて、慢性のものには、細辛を加えることがある。また、濕濡性の皮膚の疾患に、この方を用いることがある。この時は、桂枝加黃耆湯の條文を参考にして用いる。

要するに、この方は、後世派的の口吻で云えば、陽虛挾濕のものに用いるのである。同じく風濕に用いる藥方でも、麻黃加朮湯や麻杏薤甘湯よりも、虛證である。